

演抄録などがあった、これらの資料より、初期の軍隊における脚気対策が推察しうる。

軍隊の脚気対策で一時代を画したのは、陸海軍ともに明治十七年の兵食改良であろう。即ち、陸軍は大阪鎮台軍医長堀内利国の麦飯給与、海軍では高木兼寛を中心とする洋食の採用であった。

以上のことに関し、入手しえた資料より判明したことを述べるとともに、大阪にて堀内軍医長に麦飯給与を示唆したという重地正己軍医についての調査などを報告する。

陸軍では、このあと永年にわたって脚気の研究、論争が続けられるのであるが、今回は明治十七年の兵食改良までの脚気対策について知りえたことを報告する。

(西尾市民病院)

土肥慶蔵と呉秀三

長門谷 洋 治

土肥慶蔵（鶴軒、一八六六一—一九三二）と、呉秀三（芳溪、一八六五—一九三二）はともに名ある医家に生まれ、東大教授となつて前者は皮膚科学を、後者は精神医学を専攻し、わが国における斯学の基礎を築いた。両者は東大での同級生（明治二三年卒、名簿上二四年とすることもある）で在学中より親交があり（明治二三年に土肥は『外科汎論』をあらわすが、これには呉秀三の他、同級の高橋金一郎、井上通泰が協力している）、その友情は終生変ることがなかった。両者には幾つかの共通点がみられる。

①わが国で講座制の確立されつつあるときに卒業、すでに皮膚科学・精神医学の初代教授として先輩の村田謙太郎・榊俣が就いていたが、業半ば若年にして死亡、なかつぎ的な役を他科教授（宇野朗 外科・片山国嘉 法医学）がしたあとを彼らが西欧留学により先端・正統の斯学を学んで

婦国、その教授に就く（土肥 明三一、呉 明三四）。各々学統を築き、頂点の存在となり、教授在任も長く（土肥 二八年、呉 二四年）、事実上のその確立者 Begrunder となつた。②前任者がいたとはいえ、わが国における新しい体系の創始であり、いわば後発で、クラインファッハに属する科であることもあり、対外的にはむしろ東大内においても冷遇された。皮膚科は病室も少なく、精神科は教室自体が当初外部（東京府巢鴨病院内）にあった。彼らの助言があったこともあり、京大などあとの大学の方が、施設面では恵まれて発足するという状態だった。東大構内に精神科外来の設けられたのが大正三年、教室のおかれたのが同八年で、しかもそれは「見る影もなき憐れなもの」であった。③ともにもその学会を発足させ（日本皮膚病学会 明三四、日本神経学会 明三五・三浦謹之助も関与）、機関誌を発行（皮膚及び泌尿器科雑誌、神経学雑誌）し、その面での代表的学会・会誌となる。④翻訳から脱却し、わが国の症例をもとにスタンダードとなる著（土肥 皮膚科学・日本皮膚病徴毒図譜、呉 精神病学集要・精神病鑑定例）を発刊。⑤国外の学会ともよく交流し、国際的な活躍をし、わが国の紹介をなし

た。⑥社会的な方面に積極的に発言し、自ら先頭に立つて行動（土肥 性病・ハンセン氏病予防、呉 精神病者保護）、会を組織（土肥 日本花柳病予防会、呉 日本精神病者救治会）し、政府に法律を成立（土肥 花柳病予防法・癩予防法、呉 精神病院法）せしめる原動力となった。彼らはハンセン氏病患者や精神疾患患者の力強い味方となって、彼らを一步一步市民の列へ近づけた（呉他一名になる『精神病者私宅監置ノ実況及其ノ統計的觀察』はとくに知られる）。⑦郷里の医学水準・文化水準向上のために尽した（土肥 福井 若越医学会、呉 広島 芸備医学会）。⑧医史学分野で著名な業績をあげた。代表的なものとなると土肥『世界徴毒史』（邦文と独文があるが、後者は前者の単なる翻訳ではない）、呉『シーボルト先生 其生涯及び功業』であろうが、土肥の奥村良筑伝（『鴨軒遊戯』所収）、呉の『華岡青洲先生及其外科』などいずれも超一級の仕事である。呉は富士川游と同郷であり、呉を通じて土肥も早くから富士川を知っていた。彼らは森林太郎（鴨外）とも親しく（弟篤次郎が大学で同級）、太田正雄（木下奎太郎）に土肥の門下入りをすすめたのも森であった。関場不二彦も土肥を尊敬すること大で、わが国医史

学はこれら諸氏により確固たるものとなった。呉は昭和二年、日本医史学会の初代理事長に就任している。土肥、呉

（泉丸岡市にもある）。彼らについての調査・研究の一層深まるることが望まれる。

とも和漢の書に通じていたことは欧米学者にない強みで、土肥が梅毒のアメリカ（新大陸）発生説をなすにさいしてもこれが大きな武器となった。土肥は漢詩をよくした。土肥は皮膚科学（従前 皮膚病学）の語を提唱し、また花柳病の語より性病の語を用いるようにし（性病予防啓蒙の雑誌『體性』を発刊）、呉は癲狂、偏執狂などの語（とくに狂）を廃した。彼らが創案、または翻訳した語でなお用いられているものは多く、土肥の名を冠した病名で現在に至るものも少なしとしない。土肥はムラージユ（ろう標本）の技法を確立し、呉は作業療法の導入を試みた。

彼らはともに在職二五年の祝賀会がもたれており、その記念論文集が発行された。ともに胸像があり、ともに生誕百年の会が行われ、呉は本昭和五七年没後五十年の会が催された。昨昭和五六年、京都において第十二回国際神経学会が開かれ、本五七年東京において第十六回国際皮膚科学会が開かれたことは、彼らのまいた種がようやく花開いたともいえる。二人はともに多磨墓地に眠る（土肥の墓は福井

（大阪府豊中市 皮膚科）